様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月 １０ 日現在

機関番号：３６１０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０７２９３

研究課題名（和文）大規模広域資料に基づく方言の発生・伝播・定着過程解明の理論構築および研究技法開発

研究課題名（英文）Formulating theory and developing research method to elucidate the origination/propagation/fixation process of dialects comprised of large-scale and wide-ranging data

研究代表者
峪口　有香子（SAKOGUCHI, Yukako）

四国大学・地域教育・連携センター・講師

研究者番号：１０８０３６２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：瀬戸内方言におけるコピュラ形式の分布と変化を調べるため、藤原与一・広島方言研究所（1974）『瀬戸内海言語図巻』上下巻のデータと、通信調査の結果を比較し、言語変化の状況を実時間上の観点から考察を試みた。この結果、『瀬戸内海言語図巻』における少年層の言語地図の結果が今回の老年層を対象とした結果と一致していることが確認できた。コピュラ形式においては、見かけ時間上の変化は、実時間上の変化とほぼ一致していたといえる。また、瀬戸内海東部においては、経年変化に伴い、「ジャ」から「ヤ」への変化が著しいばかりではなく、地理的分布状況から「ヤ」が西進していく様子をとらえることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
GISを用いた言語地理学研究は、まだ緒に就いたばかりであり、方言分布の解析に大きく貢献することは言を俟たない。また、方言研究にGISを導入することにより、多種多様なデータの利用が可能になり、時間軸に関する分析が可能となるにつれ、多くの現象を包括的に考察することができるようになる。真に必要とする情報や知見を、地理情報科学・空間情報科学という他分野と共有し、今後さらなる学問の発展へと推進していきたい。

研究成果の概要（英文）：I have revealed the real-time situation of language change by investigating the distribution and changes of copula forms of the Seto Inland Dialect, I have made an analysis comparison between the data of [Fujiwara, Yoichi (1974). Hiroshima Institute of Dialectology. The Linguistic Atlas of the Seto Inland Sea. Vol.1 and Vol.2] and that collected through the online correspondence survey. With this analysis, I have confirmed that the data of the young group in ‘The Linguistic Atlas of the Seto Inland Sea’ accords with the data of the elderly in the present survey. It can be said that the change in apparent time was almost the same as the change in real time with regard the copula forms. Furthermore, I have found the change of form from ja to ya with the old age group to be prominent in the eastern part of the Seto Inland Sea along with the westward movement of the geographical distribution of ya.

研究分野：日本語学

キーワード：『瀬戸内海言語図巻』　方言分布　経年変化　追跡調査　空間分析　GIS　方言周圏論　方言形成論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本において言語地理学が盛んに行われた時期は 1960 年代初頭から 1970 年代後半にかけてであった。その時期からすでに約半世紀が経過した。この間、言語変化がどのように推移したか、また方言はどのように変容したのか、半世紀という時期を隔てた各々の調査にもとづいた言語地図を比較することで、その検証が可能になるはずである。

日本には、国立国語研究所編（1966-1974）『日本言語地図』1-6（以下 LAJ）と同編（1989-2006）『方言文法全国地図』1-6（以下 GAJ）があるが、さらに瀬戸内海域を対象とした言語地理学の成果として、広島方言研究所・藤原与一編（1974）『瀬戸内海言語図巻』上・下二巻がある。これらはいずれも鳥瞰図的な視点に立つ、世界でも類をみない、日本の言語地理学的研究の成果であるといっても過言ではない。

『瀬戸内海言語図巻』（以下 LAS）は、老年層と若年層の二層を対象とした言語地図であり、地理的な言語変異を描き出すと同時に世代間の言語変化を浮き彫りにしたものである。老若二世代の地理的分布を同時に示し、実時間ではない「見かけ時間」における方言差を映し出した。そこで、LAS の「実時間」上における経年変化をみるため、瀬戸内海の島嶼部および沿岸諸地域で方言通信調査を企画し、これまでに 1,930 名を超える、各地の 65 歳以上の生え抜きの方々の協力を得てデータを収集した。これをもとに GIS（ArcGIS）を駆使し、デジタル化（電子地図化）を進めた。また、並行して、LAS の老若二層の言語地図の電子化も進めた。これらの言語地図を比較することによって経年変化を見出し、そこに見出しうる方言分布の動態を捕捉し、地域言語における変異に関する理論の検証と構築を行う。

２．研究の目的

本研究の目的は、瀬戸内海地域の方言差と世代差に注目し、実時間上の変化の実態を解明すると同時に進行中の変化の様相を捉え、方言の動態と動向を捉えることにある。具体的には次の２点とした。

（１）LAS と追跡調査結果から方言の発生・伝播・定着過程解明の理論構築および地域言語研究の実践と、その方法論の構築を目指す。

（２）言語地理学と地理情報科学・空間情報科学という学問分野との融合の道を切り開く。

瀬戸内海域をフィールドとした方言研究の先駆的な業績である LAS を対象にした、データベース構築を目指し、瀬戸内海言語地図作成のための準備を進め、総計 241 項目のデジタル言語地図を完成させる。また、これまで言語変容を解明するために、実施した追跡調査の結果も同様にデジタル言語地図化を行う。

さらに大量の方言データを包括的に分析するツールとして、GIS を導入・活用して地図上で分析を行う。計量地理学や地理情報システムの分野で開発された、空間的補間の方法を時空間まで拡張し、言語変化の状況を探る。方言の衰退の実態や共通語化の進行状況を把握するため、瀬戸内海域言語伝播のパターンなどを解明することを目的とした。

３．研究の方法

LAS は、多島海である瀬戸内海を調査対象地域とした、調査地点密度の高い言語地図集である。方言の地理的伝播のパターンの分析や言語変化のメカニズムの解明、さらには方言形成論を展開するため、経年調査を行い、その変化の実態を詳細に突き止める必要があるが、LAS の調査から半世紀が経過する現在までに同規模の追跡調査が実施されることはなかった。

方言の急速な衰退が全国的に進み、限界集落を多く抱える瀬戸内海の島々の方言も同様に消滅の危機に瀕しており、追跡調査が行われないまま、方言の消滅は現実のものとなる公算が大きい。

このような問題を抱える状況の中、通信調査法を採用して、瀬戸内海全域での追跡調査を実施した。この追跡調査と LAS の結果を比較することによって未解明のままとなっている実時間上の言語変化の実態を明らかにすることが可能となる。これまでに通信による追跡調査をほぼ完了させ、GIS を活用した電子地図化（＝アーカイブ化）を行うと同時に LAS のアーカイブ化にも着手した。アーカイブ化の長所は、これら両方の結果を同一の次元で比較することが容易になる点である。また、LAS をアーカイブ化することにより紙媒体の言語地図の劣化・破損を恐れることなく、多くの研究者に提供できることになるほか、コンピュータを用い、どこからでもアーカイブ資料へのアクセスができるようになる。

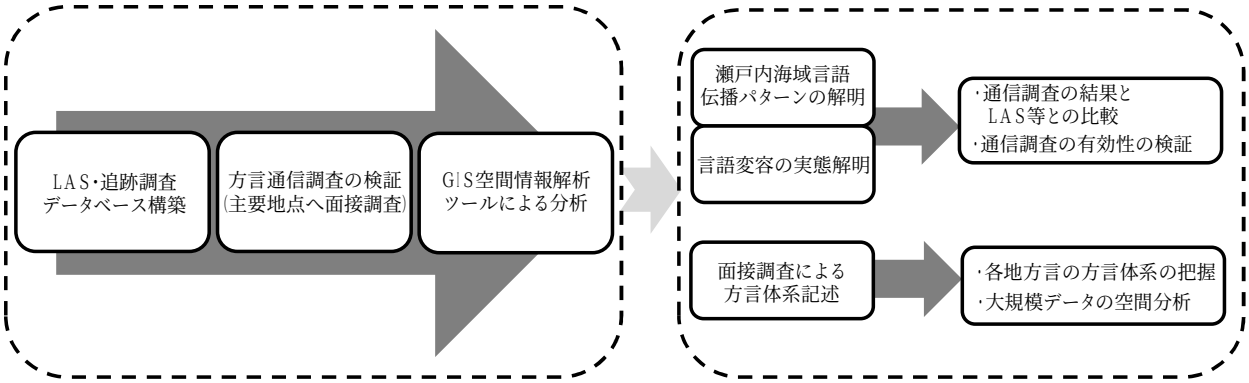
以上の流れから直面する問題を克服し、GIS を用いた実践的な方言研究を進めるべく、以下の３課題を設定した。

課題①：GIS による言語地理学研究を進展させるため、言語地図データベース構築の新たな整備と開拓を行う。GIS での分析が可能なデータアーカイブの現状を把握・整理する。

GIS 分析のデータ整備と、自らが収集した方言資料および LAS のデータアーカイブ化を進め、GIS 分析に利用可能なデータを増加させる。

課題②：調査結果を、GIS という新たな空間情報解析ツールを用いて分析し、当地域における言語変容の実態を解明する。

課題③：言語地理学的な調査と同時に方言通信調査の検証をかねて瀬戸内海沿岸部地域および島嶼部の主要地点において体系記述的研究を並行して実施する。



４．研究成果

約半世紀をこえる言語地図をもとに方言分布の経年比較を行い、実時間上の変化が方言分布として、どのように現れるのかを検討した。

課題①に対して行ったことは、『瀬戸内海言語図巻』と追跡調査のデータベース構築である。2011 年から 4 年間、瀬戸内海域の市町村教育委員会、公民館、漁業協同組合等の協力を得、通信調査法によって送付した調査票を瀬戸内海各地の 1930 地点の高齢者の方々からすでに返送して頂いた。このうちまだ点検できていなかった 541 地点のデータの整備を完了させ、全ての地点のデータを GIS 用に整備することができた。また、紙媒体で存在する LAS は、空間基盤データの要となるが、すでに、すべての言語地図の Tiff ファイル化は済ませていたため、ジオリファレンスを行い、GIS 上で新たに空間データを作成した。さらに、言語地図資料データベースの構築をはかり、すべてのポイントデータを作成し、属性データに空間情報（俚言形）を付加させていく作業を行った。俚言形は、ポイントの重なり合いや併用回答を考慮し、1 枚の地図をデータ化するには、かなりの時間を費やすことになり、すべてのデータ化までは、出来ていないのが現状である。

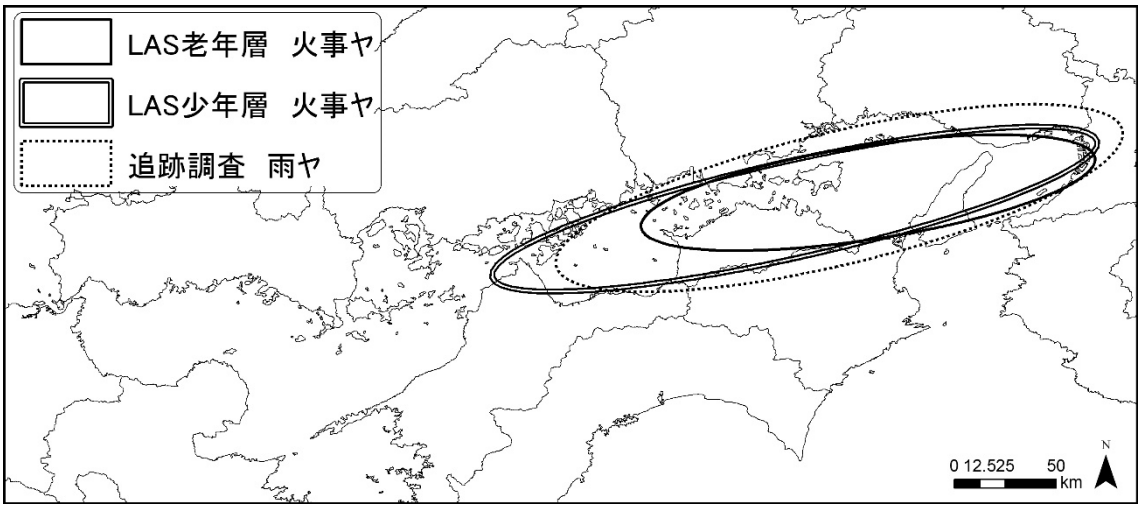


図１　コピュラ形式「ヤ」（空間分析図）

課題②に対しては、瀬戸内海地域におけるコピュラ形式の分布と変化を GIS の空間分析を用い調べた。この結果、おおむね、『瀬戸内海言語図巻』における少年層での結果が今回の老年層を対象とした結果と一致していることが確認できた。コピュラ形式においては、見かけ時間上の変化は、実時間上の変化とほぼ一致していたといえる（図１参照）。LAS では、テンス過去の項目は取り上げられていなかったため、「追跡調査」と「小豆島調査（岸江信介他編 2015）」の

地図について考察した結果、小豆島町と土庄町とでは、言語変化に差があることも判明した。
　まとめると、瀬戸内海東部においては、経年変化に伴い、「ジャ」から「ヤ」への変化が著しいばかりではなく、地理的分布状況から「ヤ」が西進していく様子をとらえることができた（研究業績：峪口（2017）「瀬戸内海域方言におけるコピュラ形式の分布と変化」『方言の研究 3』）。

　課題③に対しては、瀬戸内海地域および島嶼部の主要地点における言語地理学的調査と、同時に挨拶・文法・語彙項目を中心とした体系記述的研究を並行して実施した。調査地点は、周防大島、伊吹島、淡路島であり、各地方言の先行研究を参考にしつつ方言の体系を整理して記述をはかった。
　なお、今後さらに瀬戸内海全体へと地域をひろげ調査を継続するとともに、他の項目の分析を行い、言語変化と分布変化の関係について考察を加えていく予定である。

参考文献：岸江信介・峪口有香子編（2015）『小豆島言語地図』科研成果報告書　基盤研究(A)「方言分布変化の詳細解明―変動実態の把握と理論の検証・構築―」（代表：大西拓一郎）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 峪口有香子・岸江信介	４．巻 64（12）
２．論文標題 「ツイートにみられる「ことば」の地域差」（特集：ツイッターからみえる地域と社会）	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『地理』	６．最初と最後の頁 20－27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 峪口有香子	４．巻 3
２．論文標題 瀬戸内海域方言におけるコピュラ形式の分布と変化	５．発行年 2017年
３．雑誌名 方言の研究	６．最初と最後の頁 239-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 峪口有香子	４．巻 4
２．論文標題 代理出席を申し出る場面における配慮表現―新宮・熊野市を事例として―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 近畿方言における配慮表現　研究成果報告書４－新宮・熊野市域調査編	６．最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 仙波光明・峪口有香子	４．巻 62
２．論文標題 「三好市の方言」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『阿波学会紀要』	６．最初と最後の頁 113-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 峪口有香子・岸江信介・桐村喬	4．巻 31(8)
2．論文標題 Twitter データを利用した言語地理学的研究の可能性―「おもしろい」「おもしろくない」を事例として―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 計量国語学	6．最初と最後の頁 537～554
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.24701/mathling.31.8_537	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 峪口有香子	4．巻 7
2．論文標題 「四国大学「とくしまで学び育てる地域貢献型人材育成事業」の取組みについて（若年者雇用の国際比較）」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『経済環境研究調査報告書』	6．最初と最後の頁 41-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 峪口有香子
2．発表標題 方言における東西対立の現状
3．学会等名 The 17th Annual Conference of the International Association of Urban Language Studies (USL17)（国際学会）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 峪口有香子・二階堂整
2．発表標題 「ツイッターデータを利用した地理言語学的研究の一例―「あーね」の分布を追う―」
3．学会等名 日本地理言語学会第一回大会
4．発表年 2019年

１．発表者名 峪口有香子
２．発表標題 「地域の活性化と四国大学の果たす役割」（シンポジウム:SDGs を徳島から考える―ディーセントライフのための産学協同―）
３．学会等名 日本比較経営学会第44回全国大会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 岸江信介・峪口有香子
２．発表標題 日本における言語地理学とその応用―資料編―
３．学会等名 語言地理類型論国際研討会（於：賀州市、中国）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 岸江信介・峪口有香子
２．発表標題 日本における言語地理学とその応用例―大規模データの有効利用―
３．学会等名 語言地理類型論国際研討会（於：賀州市、中国）（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計3件

１．著者名 峪口有香子	４．発行年 2019年
２．出版社 四国大学地域教育・連携センター	５．総ページ数 521
３．書名 「徳島県美馬市ふるさとことば（1）―方言談話資料を中心に―」『平成31年度「美馬市生涯活躍のまちに係わる「大学連携いきがい支援プログラム」開発等委託事業研究成果報告書』	

１．著者名 峪口有香子	４．発行年 2020年
２．出版社 四国大学地域教育・連携センター	５．総ページ数 707
３．書名 「徳島県美馬市ふるさとことば（2）―方言談話資料を中心に―」『平成31年度「美馬市生涯活躍のまちに係わる「大学連携いきがい支援プログラム」開発等委託事業研究成果報告書』	

１．著者名 磯田弦，板井正斉，岸江信介，峪口有香子，田中誠也，藤原直哉，渡辺隼矢	４．発行年 2019年
２．出版社 古今書院	５．総ページ数 152
３．書名 『ツイッターの空間分析』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

峪口　有香子(2018)「グロットグラム」『JR福知山線福知山ー尼崎間グロットグラム集』pp.126-133.135
峪口　有香子(2019)「言語地図」『中国地方言語地図』pp.76-79.113-125
峪口　有香子(2019)「兵庫県多紀郡氷上郡接境地域言語地図，兵庫県北播磨地方言語地図」『兵庫県各地域言語地図拾遺集Ⅰ』pp.28-29.129

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考